

熊本城 復興に向けて

〈7〉明治22年「金峰山地震」の記録

熊本城の天守だけでなく、城下町の多くの建物が焼失した西南戦争から12年後の明治22(1889)年、市制施行により熊本市が誕生しました。この年の梅雨は連日の豪雨で、7月23日に京町本丁の瀬戸坂の崖が崩壊するという、大きな被害がありました。そのわずか5日後の7月28日、夜遅い時間に突然の大きな揺れが市民を襲いました。これは熊本市として初めて経験した大規模な地震で、「金峰山地震」とも呼ばれます。当時の人々は今回私たちが経験したように、余震のため屋外で不安な夜を過ごしました。また、8月3日にも激震とされる強い地震が発生したほか、年が明けても揺れが観測されているように、長く続く余震が特徴で、今回の地震と共通する部分もみられます。

最初の地震発生の日後には被害視察のため、明治天皇の侍従^{※1}である富小路敬直と荻昌吉の熊本派遣が決定し、6日の午後に熊本城の第六師団を訪れました。この時に彼らは熊本城の被害を目の当たりにしたのでしょう。第六師団が作成した「震災二関スル諸報告」(宮内公文書館所蔵)で被害の実態を知ることができます。

報告書によると、地震で崩落した石垣は42カ所、膨らみが生じた石垣は20カ所で、これらは面積にして8,842㎡に及びます。また崖の崩落も7カ所記録されています。この報告書は、第六師団のさまざまな部署の用紙が使われています。各部署で被害状況を調査し、すぐに1冊にまとめて侍従に渡したのかもしれませんが。

また、当時の新聞によると富小路侍従には富岡熊本県知事から市中や熊本城内の被害写真が渡されました。これらは熊本の写真師富重利平が撮影したもので、西出丸では石垣とともに櫓が崩落した生々しい様子が記録されました。この場所は3日の激震で崩落した場所で、当時、陸軍は石垣上の櫓を火薬庫として利用していました。最初の地震後、櫓は倒壊の危険があり、中の火薬類を



▲石垣の崩落を黄色、膨らみを赤色で示した図
(宮内公文書館所蔵「震災二関スル諸報告」)



▲旧熊本城西出丸 第六師団火薬庫崩壊之景
(画像提供:国立科学博物館)

運び出していたため、難を逃れました。

侍従らは視察を終えて8月18日に帰京し、明治天皇へ熊本の状態を伝えました。この結果、明治天皇から当時の金額で千円、皇后から300円の恩賜金の下され、熊本の街の復興に活かされました。

さて、熊本城の復旧は陸軍が行いましたが、その費用は9月10日の時点で約10万7千円、現在の価値にして約35億円が計上されています。莫大な費用を投じて修復しようとしたのには、どのような理由があったのでしょうか。当時の第六師団監督部長井出正章^{い で まさ あき}は、陸軍大臣大山巖^{お お や ま い わ}に次のように語っています。「西南戦争では、大敵に囲まれ数週間の防戦の末、一人たりとも城内に入れなかったのは、長官の戦略と将校の戦功によるものだが、加藤氏の築城の計画もまた大きかった。今、保存費の金額の為に名城の旧跡を失うのは遺憾だ。」日本最後の内戦、西南戦争での勝利によって、熊本城は陸軍草創期の重要な戦跡としても評価され、それが城の保存へとつながったのです。

※1 侍従 …… 天皇のそばに仕える役目の役人